

氏名(本籍)	三輪民子(埼玉県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	甲第101号
学位授与年月日	令和3年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	「読むこと」の学習指導論の研究 —「トンネル式読解」の場合—
審査員	主査 日本体育大学 教授 府川 源一郎 副査 日本体育大学 教授 奥 泉 香 副査 日本体育大学 教授 島 田 功

### 《論文審査結果の要旨》

本研究の目的は、林進治が昭和初期に考案した「トンネル式読解」の特徴を明らかにし、それを「読むこと」の学習指導論史に新たに位置づけることである。論者は、その作業を通して「トンネル式読解」が持つ「読むこと」の学習指導論としての可能性を探ろうと試みた。

「トンネル式読解」とは、林進治(1911-1987)が考案した教材文を部分に区切って読み進める指導方法のことである。当時の国語読み方指導は、全文通読によるセンテンスメソッドが主流であり、部分から読み進める方法は、すでに過去のものと看做されていた。国語教育史研究においても、戦前の主要な論者である渡邊(1933)、石井(1939)、峯地(1940)らは、内容と形式の一元化を提唱したセンテンスメソッドが新しい時代を切り開いたとしており、また、戦後における飛田(1965)、高森(1979)、望月(1984)、井上(2009)らも同様の認識である。したがって、部分に区切って読み進める指導方法である「トンネル式読解」は、これまで正面から取り上げられて研究対象になったことはなかった。そこに着目し、その位置づけを図った点に、本研究の第一の意義がある。

研究の方法としては、明治末期から昭和初期に至る読み方教育理論や実践例との比較において、「トンネル式読解」の学習指導論が考察されることになる。具体的には、雑誌『教育研究』(創刊1904年)『国語教育』(創刊1916年)『教育・国語教育』(創刊1931年)に掲載された実践指導例を中心に分析・考察がなされ、明治末期から昭和初期における読み方学習指導論の特徴が比較・検討される。その上で、「トンネル式読解」との比較・考察が行われ、その特徴の抽出や独自性の認定が行われる。なお、「トンネル式読解」についての戦前の資料としては、神奈川県女子師範学校附属小学校出版による『国民学校の経営と教法』(1941)と神奈川県女子師範学校附属国民学校出版『国民科授業細目(初二)』(1942a)、『国民科授業細目(初四)』(1942b)を対象にしている。この資料は、これまでほとんど知られていなかったものであり、新たな資料発掘としても貴重な仕事だと判断できる。

本研究の成果は、第一に、明治期において中心的な指導法であった「部分法」の特徴を整理し、「トンネル式読解」との関係性を明らかにした点である。両者は指導の方法としての共通性を持っているものの、

「部分法」は、難解な教材を「区分」して読むという便宜的な方法としての意味しかない。それに比べて「トンネル式読解」は、部分を総合して読み進めて、全体への統一した読みをつくっていく指導方法である。つまり、「トンネル式読解」は、方法論的には「部分法」に類似したところがあるが、その背後にある教育思想や文章観が異なることを指摘した。

第二の成果は、「トンネル式読解」の学習指導論をセンテンスメソッドとの比較において、考察したことである。垣内(1922)は全文通読後に「文意の直観」から出発して、「作者の思想の姿を文の形に見る」ことを主張した。つまり、センテンスメソッドによる読みの目的は、作者の思想を捉えることにある。その結果、芦田の「冬景色」の授業(垣内1922, pp.12-23)をはじめとして類似の「教授例」の分析からも、学習指導が教師主導になりがちになるという問題点が批判された。こうした批判に加えて、文字・語句指導における問題についても様々な指摘がなされた。センテンスメソッドにおいては、文章を読めないままに終わってしまう子どもや語彙力低下の問題(渡邊1933, p.48)があったことも指摘されていた。論者は、このようなセンテンスメソッドの持つ問題点が、「トンネル式読解」を生み出す要因になったとする。

こうした状況の中、林(1941, p.72)は、「教師主導」では、子どもの読みの力が育たないと考え、「児童の読みの自然」を尊重することを基本にした「トンネル式読解」による学習指導を案出したのである。この「トンネル式読解」を実践的に分析した結果、読み手の主体的な行為に立脚した話し合いによって、読みを深めることのできる学習指導論であることが検証できた。また、「予想」や「総合」という学習が、部分が全体へと統合されるという「トンネル式読解」ならでの考え方も解析することができた。

第三の成果は、戦前における子どもを中心に据えた学習指導論が、どのような様相で発展をしてきたのか、その流れの中に「トンネル式読解」がどのように位置づけられるのかを明らかにしたことである。それは同時に、子どもを主体とする学習指導論として「トンネル式読解」の可能性を見出したということの意味する。

戦前における子どもを中心に据えた学習指導論は、開発主義による教育論に始まり、その後の自学補導による教授などを経て、大正自由主義教育でより一層開花した。大正年間においては、自学を重んじる学習に質的な発展があった。それは「鑑賞教授」による子どもの個々の感想を生かす学習である。外的な子どもの自発的な活動ばかりでなく、読み手としての内的な子どもの読みを尊重する学習の考え方が生まれたのである。その流れは、教師主導となったセンテンスメソッドにおいても、「文意の直観」という子どもの印象や感想の尊重という形で生かされていった。さらに、「独自学習」や「相互学習」「協働学習」といった子ども自身の読みを基にした相互の話し合いという新たな活動による読みの形態をも生み出した。しかし、それらは、根本的には教材中心の理論に立っている。

これに対して「トンネル式読解」は、子どもを主とする学習の歴史的な到達点を継承し、同時代における学習者論の影響を受けていた。「トンネル式読解」はそれとは異なり、読み手主体を中心に据える考えに立脚する点において、戦後に繋がる学習指導論としての可能性を持っていた。そこに「トンネル式読解」の独自性と特徴とがあった、と論者は結論している。

全体の構成の緊密さや個々の論述にやや弱さが見られるものの、研究対象として取り上げた大正期から昭和初期の読み方学習実践や指導論を博搜整理し、それと対置する存在として「トンネル式読解」を位置づけるという目的は十分に達成できたと、審査員一同は判断した。今後は、論者自身が課題として

挙げているように、さらに大正期から昭和初期の実践について調査の範囲を広げることによって、部分から進める学習指導論についての考察を深めていくことも期待される場所である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められた。

《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

令和3年1月23日